

「实在概念」としての範疇 ——ブレンターノ『存在者の多義性』に見る存在論——

村田憲郎

0. はじめに

本論は、フランツ・ブレンターノの学位論文 *Dissertation* であり最初の著作である『アリストテレスによる存在者の多様な意味について *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles*』(以下『存在者の多義性』、MSA と略称) (1862) の特色を、とりわけその主要なテーマである「範疇」の位置づけを通じて明確化するものである。ブレンターノの哲学全般がそうであるように、この著作も(戦前に翻訳がなされたものの) 現在よく知られているとは言いがたい。ところで範疇とは何か¹という議論は、アリストテレス研究史の中でも最も議論された主題の一つと言われる²が、本著作はそれにとどまらず、現象学はもちろん現代の分析形而上学など、さまざまな方面と関わってしかるべき理論内実をもっていると思われる。そうした事情に鑑みて、本論ではできるだけこの著作の基底をなすと思われる問題関心から忠実にこの主題を理解するように努めたい。

具体的には、まず(1) この著作の概略を「学の基礎づけ」という問題意識の上で示し、次に(2) 範疇の位置づけについてブレンターノ自身が名指している当時の三人の論者を取り上げて議論の外枠を描いた上で、彼自身の範疇の捉え方を、(3) 「实在概念」としての性格づけ、(4) 「真としての存在」と呼ばれる存在者および論理的諸概念からの峻別、(4) 「原因」の諸概念の遮断、という三点において特徴づけ、最後に以後のブレンターノ哲学やフッサール現象学との関連についての見通しを示す。

1. アリストテレスの叙述のうち最も網羅的なのは、「実体 *οὐσία* (何であるか *τὸ τί*)」、「量(いかほどあるか *ποσόν*)」、「質(いかにあるか *ποιόν*)」、「関係(何に対してあるか *πρός τι*)」、「何処(どこにあるか *ποῦ*)」、「何時(いつあるか *ποτέ*)」、「能動(*ποιεῖν*)」、「受動(*πάσχειν*)」、「所有(*ἔχειν*)」、「状態(*κεῖσθαι*)」の10個 (catég., 1b25-27)。

2. R. Smith, p.55

1. 『存在者の多義性』の概要

範疇を扱う前に、必要な限りでごく簡単に『存在者の多義性』の全体像をスケッチしておこう。まずどのような問題連関の中で範疇が取り上げられたのだろうか。

この著作はフッサールにも顕著に見られる、学一般の動揺を背景とした「学の基礎づけ」と同じ問題意識に貫かれていると言える。後にブレンターノが回顧的に述べているように³、哲学全般が動揺する 19 世紀半ばのドイツ⁴にあって、アリストテレスに立ち返ることは、彼にとって学一般をその端緒から基礎づけ直すことと同じことであった。したがってこの著作が「存在者としての存在者 ὄν ἢ ὄν」とは何か (MSA.2) という形而上学的ないし存在論的⁵問いを扱うのは、最も包括的な意味で学的に扱おうるものの範囲を画定するためである。しかし後述するように「存在者」とは類概念としての普遍概念ではないゆえに、直接定義することができない⁶。したがってアリストテレスは「存在者とは何か」という問いに定義をもって答えようとするのではなく、「存在者とはさまざまな仕方と言われる」ことを出発点とし、「存在する」「である」「がある」のさまざまな用法を手がかりとして存在者の本来的な意味を探していく。そこでブレンターノがまず注意を促すのは、『形而上学』の以下の叙述である。

「この端的に言われる存在者にも多くの意味がある。例えばその一つは偶然的存在者 ὄν κατὰ συμβεβηκός であり、他には真としての存在者 ὄν ὡς ἀληθές および偽としての非存在者 μὴ ὄν ὡς ψεῦδος を意味し、これらの他にもなお諸範疇に分かれる諸形態 τὰ σχήματα τῆς κατηγορίας、例えば、何であるか τὸ τί、どのようにあるか τὸ ποιόν、どれほどあるか τὸ ποσόν、何処にあるか τὸ ποῦ、何時あるか τὸ ποτέ、その他このような同様のものを意味し、さらにこれらすべてと並んで、可能のおよび現実的存在者 τὸ δυνάμει καὶ ἐνεργείᾳ を意味する」(1026a33)。

ここで挙げられているのは (1) 偶然的存在者⁷、(2) 真としての存在者および偽とし

3. 1916年3月21日付のクラウドス宛書簡のよく知られた箇所。「私はまずもって弟子として一人の師に倣わなければなりませんでしたが、哲学の最も惨めな墮落の時代に生まれて、いにしへのアリストテレスより良い師を見いだすことができませんでした」(Brentano (1952), S.291)。なおブレンターノの生涯に関しては Kraus 参照。

4. ヘーゲル没後のドイツの哲学をめぐる諸動向に関しては Fugali が詳細。

5. 本論は「存在論」という語を多用するが、ブレンターノ自身は「形而上学」をより好んで使っている。本論が関わる限りでは同義とみなして問題はない。

6. 『形而上学』(1003a21, 1003b21, 1026a29, 1028b2) 等参照。

7. 一般に「付带的」と訳されるが、ブレンターノは das zufällige Sein ないし das Zufällige と訳しているため「偶然的」と訳す。

ての非存在者、(3) 範疇の諸形態、(4) 可能のおよび現実的存在者の四つである。つまり「ある」のこの四つの用法のうちで、本来の存在者を表すのはどれかという形で議論は進んでいく。

これらのうち、(1) の偶然的存在者は本来の意味での存在者ではないとして排除され、次に (2) (重要なので後述するが) も (1) と同様に本来の存在者としては認められず、存在論ないし「形而上学」の対象からは排除される。次には (4) の可能のおよび現実的存在者が先に吟味されるが、ブレンターノはこれを「範疇の諸形態」に準ずる本来的な存在者であると認めている (MSA, 40)。可能性は「質料 ύλη」、現実性は「形相 εἶδος」と密接な関係があるが、ここではとりわけ可能的／現実的存在者によって定義されるものとしての「運動 κίνησις」の概念が検討される (MSA, 52f)。

その上で (3) 「範疇の諸形態」が論じられるが、ブレンターノによれば、四つのうちで最もすぐれて「存在するもの」であるのはこれである (MSA, 219)。

ところでアリストテレスが挙げた範疇について、この数と種類は体系的な必然性をもつのかということが議論になっていた。例えばカントはこれを原則を欠いたまま行き当たりばったりにかき集めたものと見なしており、必要なものが不足した余分なものが含まれていると批判している (MSA, 184, 194)⁸。実際範疇の数からしても、アリストテレスは最大で 10 個挙げているが、その他 8 個、7 個、3 個、2 個しか挙げていない箇所もあり、アリストテレス研究者でさえその数と種類に必然性はないと考える者もいた⁹。むしろ大方の研究者達はそこに必然性があると主張したが、それを可能にする諸原理および実際の演繹を示すことはできなかった。

そこでブレンターノは、演繹の諸原理を挙げながら、経験的なものに訴えることなく、この 10 個ないし 8 個の範疇¹⁰を実際に演繹してみせた。その歩みを簡単に追ってみると¹¹、存在者はまず「実体」と「偶有性」に区別され (MSA, 149) (その限りでは 2 個に見える)、さらに「偶有性」は、「絶対的偶有性」(=「様態」と「関係」とに区別される (MSA, 150) (このとき 3 個に見える)。この「様態」は、その当のものうちにあるものか、一部はそのうちにあり他の一部はその外にあるものか、その当のものに対してあるものか、という観点から「内属 Inhärenz」「作用 Operation」

8. Vgl., *Kritik der reinen Vernunft*, B107 またヘーゲル『哲学史講義』にも同様の見解があるという。

9. 例えばプラントゥル Prantl はアリストテレスが三つしか挙げてない箇所について「理性ある人ならば誰でも、この三つに還元してもかの七つや八つにすることと同様に満足することだろう」(S.205ff) と述べて、そのつどの論述の文脈で合理的に理解できることで満足しているという (Vgl., MSA, 73)。

10. アリストテレスがもともとピュタゴラス学派やプラトン学派の 10 という数への嗜好にしたがって 10 個としたが、のちに「所有」「状態」の二つを余計とし暗黙裏に放棄して 8 個とした、したがって本来は 8 個だとする、当時の優勢な見解があり、ブレンターノは後述の三人の論者とともこれを受け入れている。

11. 詳細は村田 (p.34-38) 参照。

「状況 Umstand」の三つに区別される (MSA, 153–154) (ここで言う「作用」が「運動 κίνησις」と呼ばれ、「能動」「受動」「所有」「状態」の四つを一つにまとめると範疇は7個に見える)。さらに、諸範疇はそれぞれ「最高次の類」であり、もろもろの類一種の系列において普遍性の極をなすが、他方で範疇には属さない幾つかの基本概念がある。例えば「形相」「質料」「因果性」「時間」「場所」などがそうである。こうした諸概念を尺度とすると、「内属」は「質」と「量」に、「作用」は「能動」と「受動」に、「状況」は「何処」と「何時」とに分割される (8個)。こうしてブレンターノは範疇の数と種類を、経験的事実や文献学的調査に訴えることなく、一応は「アプリオリに」導出してみせ¹²、しかも文脈によって異なるアリストテレスの叙述の揺らぎを切り捨てることなく、逆にそれらに通底する体系的整合性を示したのである。

2. 範疇についての三つの立場

ブレンターノは範疇を論じるにあたって、当時の議論における三つの有力な立場を紹介している。

1. それ自身は实在概念ではなく、あらゆる实在概念をそのうちに受容する「枠組み Fachwerk」。「述語のための場所」を表示するもの。
2. 判断における述語が分離したものの、最も普遍的な述語、「述語概念」。
3. 存在者そのものの最高次の類。「現実的概念」。

ブレンターノ自身はこれらの立場の各々から説得的な論点を取り込みつつも、第三の立場に与することになる。以下順に見てみよう。

2.1. ツェラー——概念の「枠組み」

第一の立場の代表者としてはツェラー (Eduard Zeller, 1814–1908) が挙げられる。彼は新カント派の創設者の一人に数えられ、また後に「能動理性」の解釈を巡ってブレンターノと論争したことも知られている¹³。特に参照されるのは大著『歴史的発

12. 純粹に理論的にこの演繹が正当なものであることまでは本論は主張できないが、そうした試みとしては *Jacquette*, p.53ff 参照。

13. 概要をここで示すと、ブレンターノの教授資格論文『アリストテレスの心理学 *Die Psychologie des Aristoteles*』の附論「作用、とりわけアリストテレスの神の創造作用について」に対して、ツェラーが『ギリシャ人たちの哲学』第三版 (1879) の脚注で逐語的な批判を試み、これに対してブレンターノは『アリストテレスの創造説について *Über den Creatianismus des Aristoteles*』(1882) および『ツェラーへの公開書簡 *Offener Brief an Zeller*』(1883) を発表して応戦した。ブレンターノはアリストテレスの神を強い意味での創造神と考え、人間の能動理性

展におけるギリシャ人たちの哲学 *Die Philosophie der Griechen in ihrer Geschichtlichen Entwicklung*』(1856–68) のアリストテレスの章である。

範疇は「实在概念ではなく、あらゆる实在概念がその中に記入されうるような枠組みだけを与えるべきである」(Zeller, 262)。この捉え方によって彼は、範疇を「形而上学的」概念ないし「实在するものの特定の实在的關係を表す」諸概念(「存在者」「一者」「運動・変化」「現実的・可能的」および四原因等)(S. 261)から区別している。後者の諸概念は、特定の「实在的直観 *reale Anschauung*」を基盤としてもち、「形式的性格や形式的区別に関わるのではなく」そうした直観から得られる实在的なものの「抽象的、形而上学的な表現」(S. 262)であると述べているところから、彼は範疇とその他の实在的なものとを、枠組みと直観、形式と内容¹⁴という関係で捉えていることがわかる。したがってこの捉え方をごく弱い意味でカント的と呼んでも差し支えないだろう¹⁵。

また彼は、次に見るトレンドレンブルクの、範疇は本来四原因と同列か少なくとも関係づけられるべき、という論点を退けることで、彼の理論のもつ発生論的な性格からも距離をとっている。

なおブレンターノがツェラーから学んだと思われる点も幾つかあり、最も眼を引くのは範疇の演繹の道筋¹⁶であるが、ブレンターノはそこに原理が欠けていると指摘している(MSA, 183–4)。

は神がそのつど人間のうちに生み出すものと解釈し、アフロディシアスのアレクサンドロスやアヴェロエス等、対立する諸解釈を批判していたが、ツェラーは後者の立場に近く(George, VIII f)、永遠の神の精神があらかじめ存在し、人間は理性を行使するごとにそれと同化するとした(George & Coehn, 37–40)。また神崎(p.329–332)参照。

14. 実際、『存在者の多義性』を踏まえた新版の注では、ブレンターノの「实在概念」という捉え方を「諸経験の系列の共通な内容を表す」(強調ツェラー)と整理した上で、批判している(Zeller, S.263)。

15. とはいえこの論述の限りでは、カントの言うような、現実世界に先行する「純粹悟性概念」とまでは言えないし、ツェラーのこの捉え方が後の新カント派と呼ばれるゆえんの立論と内的関係があるとも言えない。この点では拙論(村田参照)および本発表の発表要旨は言い過ぎであった。

16. 「まず第一に各事物における根源的なもの、すなわちその不変の本質あるいはその実体が、全ての派生的なものから区別される。それから後者の内部で再び固有性 *Eigenschaften* と、活動 *Tätigkeiten* と、外的状況 *äussere Umstände* が区別される。固有性は事物それ自体に該当するものであるか—この場合固有性はあるいは質的な、あるいは量的な規定性を表現する、つまり基体に関係するか形式に関係するかである。—あるいは固有性は、事物に別のものとの相関においてのみ該当するか—これは関係的なものとなる—である。活動に関しては最も関わりが深い対立は能動と受動の対立であり、これに対して所有と位置は、既述のように、不確かな位置しかもたず、アリストテレス自身が後に黙して放棄した。最後に外的状況の場合は空間的な相関が問題となるか、時間的な相関が問題となるかであり、つまり何処か何時かである」(Zeller, S.190f)。ここにブレンターノが範疇を演繹したのと全く同じ道筋が描かれているのがわかる。

2.2. トレンデレンブルク——「述語概念」

第二の「述語概念」という立場の代表はトレンデレンブルク (Friedrich Adolf Trendelenburg, 1802–1872) であり、彼は『存在者の多義性』に関する限り同時代の研究者では最も重要である (実際ブレンターノは執筆に先立ってベルリン大の彼の下で直接指導を仰いだ)。彼の『カテゴリー論史 *Die Geschichte der Kategorienlehre*』(以下 GK と表記) は、一部がアリストテレスの範疇論、二部が哲学史全体にわたる範疇論の概観であり、この書の最終章および『論理学研究 *Logische Untersuchungen*』(1840) では独自の哲学が展開される。

彼によれば、「範疇」は判断ないし言表を根源として、そこから述語が主語と分離してできたとされる (GK, 12)。まず彼は周到な語法の調査から *κατηγορεῖν* が「述語づける」、*κατηγορία* が「述語」を意味することを確認し (GK, 4–11)、アリストテレスの大原則である「全体は部分に先立つ」に依拠して、命題は単独の概念に先立つ¹⁷と主張する (同じ理由から、著作としての『命題論』も『範疇論』¹⁸より先に書かれたと述べている) (GK, 15f)。そして「派生語 *παρῶνυμον*」や「語尾変化 *πτῶσις*」という語に着目しながら、範疇の種類と数はさまざまな「文法的な諸形態」にしたがうものだと主張した (GK, 23–33)。彼によれば「実体」は名詞、「質」「量」は形容詞 (特に「量」は数詞にも)、「能動」「受動」は動詞の能動態／受動態、「何処」「何時」は副詞、「関係」はその他形容詞の比較級などにそれぞれ対応する。

この主張だけを取り上げると彼は言語主義者、唯名論者のように見えてくる。実際この「文法起源説」はそのように受け取られ多くの批判を浴びたし、ブレンターノ自身もこの見解を唯名論者オッカムと結びつけている (MSA, 192)。ただし公平のために補足されるべき¹⁹は、まず第一にトレンデレンブルクはこの「文法起源説」を積極的に主張しているのではなく、アリストテレス自身が文法形式と範疇とが対応しない例を多く挙げていることもあり、その不十分さに否定的だということ、また第二に、彼は本来、範疇の分化は言語形式に由来するものではなく、事物ないし事象の発生に相即した分化でなければならないと考えているということである。本来の意味での範疇は「生成する事象 *werdende Sache* の関係に即して」規定される (GK, 14) と言われ、「産出的実体」を主語としてそこから生じる述定が、事象の生成に即した述定だとされる (GK, 14f)²⁰。他方、同じ「本質」を表す語のうち、定義を与える

17. 後述のようにこの点はブレンターノの「真としての存在者」の捉え方にも受け継がれているが、このことはよく言われるようなブレンターノの「非命題的」性格と矛盾するものではない。

18. そもそも『範疇論』には偽作説があるようである。岩波全集版第一巻の山本光雄による訳者解説参照 (p.154f)。

19. この点でも拙論および本発表要旨は訂正を要する。

20. 『分析論後編』一卷 22 章が参照される。「この木は白い」は事象に即した述定の例、「あ

「何であるか τὸ τί ἐστὶ」(これは実体に限らず、範疇全般を表す用法も実際に見られる)と、根源的な基体を表す「そもそも何であったか τὸ τί ἦν εἶναι」とが区別され、後者が自らに規定性を与え前者となっていく生成の過程が、本来的述定を基礎づけるものとされる。

この生成の過程がそもそも何なのかはこの著作からは明確でないが、いずれにしても實在の世界が事象の生成の過程として描かれる²¹ことから、最も重要なのは「原因」の概念ということになり、範疇もまた本来「四原因」と倒置されるか関係づけられるはず、という彼の主張と、アリストテレスにもう一つの不十分さを見る批判(GK, 187)がここから出てくる。「諸範疇が実在的に扱われるならば、諸範疇の根は諸事物の根源のうちに探し求めるのが首尾一貫したことであろう」(ebd.)。しかしこの論点も同様に、他の論者達に批判されることとなった。

2.3. ボーニッツ——「現実的概念」

第三の立場はボーニッツ(Hermann Bonitz, 1814–1888)のものである。ブレンターノは彼の範疇の捉え方は「現実的概念 wirkliche Begriffe」であると整理し、自分もこれに与すると述べている。ボーニッツはトレンデレンブルクを直接に批判する論文『アリストテレスの範疇について *Über die Kategorien des Aristoteles*』(1853)(以下KA)を公表して、自身の立場を明確にしているので、彼の議論は問題を整理する上で教示に富むと思われる。彼の論点を幾つか取り上げよう。

何よりもまず文法起源説は品詞の区別を範疇の区別の起源とするが、そもそも品詞は文法的な区別であり、他方範疇は概念的な区別であって、概念は「語による表わし *Bezeichnung*」を必要としないゆえに、語およびその文法から独立している(KA, 640)。

第二に、トレンデレンブルクは自身の立論から出発して範疇が「四原因」に関係づけられるべきだと主張するが、むしろ範疇のもとでなされているのは、「実在的な根拠 *des realen Grundes*」を探求することはまったく度外視して、経験に即して *erfahrungsmäßig* 与えられるものの単なる把握のために」(KA, 609)、ある事物につい

の白いものは木である」はそうでない例。

21. 詳細は『論理学研究』を見るべきだが、概略を示すと、存在者としての存在者に関わる「形而上学」と、思惟の形式に関わる「論理学」とは、「直観的悟性」によって合致するが、その際あくまでも存在者が思惟に先立つのでなければならない(この点で彼は思惟を優位におくヘーゲルやマルブルク学派の新カント派と対置させられる)(Fugali, S.31-34)。そして形而上学における物の根本概念(實在範疇)と、論理学における思惟の根本概念(様相範疇)とを形成する共通の源泉は「構成的運動 *konstruktive Bewegung*」である(GK.364f)。「運動は思惟と物とに共通である」(GK. 368)。Fugaliは彼のこうした構えをロマン主義やシェリングになぞらえている(S.34)。

てそれが何であるか、如何にあるか、等々を問うことである。後述のブレンターノと同様の原因の概念の遮断という身振りは、ボーニッツにすでに見られる。

第三に、トレンデレンブルクは *κατηγορία* や *κατηγορεῖν* の用法を調べることでその意味を突き止めようとしたが、「範疇」という考えがアリストテレスがはじめて発見した発想だとすれば、彼はそれを表す概念をもたず、不正確な既存の語で表そうとしたのだから、どのように彼がパラフレーズしているかも調べなければならない (KA, 611ff)。こうして「諸類 *γένη*」「第一のものども *τὰ πρῶτα*」「分割 *διαίρεσις*」「語尾変化 *πτῶσις*」(ただしこれはトレンデレンブルクが言うような文法上のものにとどまらず、論理学でいう推論の「格」なども含む)等の語を吟味しながら、あらためて範疇は「存在者の最高次の類」であると特徴づけられる。そしてこの「存在者の最高次の類」は、同時に判断の述語という意味をもつことはできない。

さらに、範疇のうちでも基体として最も重要な「第一実体」は、本来的なあり方では主語とはなっても決して述語となることがない (Categ., 3a36, Metaph., 1017a21)とされているが、これをどう説明するのかという困難がある (S.617)。こうして幾つもの難点を指摘したことで、ボーニッツはブレンターノの態度決定を促したと思われる。

なお興味深い点として、範疇の数や種類が演繹可能かどうかに関しては、ボーニッツは不可能と考えている。その根拠として『分析論後編』一卷7章 (75a39)の議論が引き合いに出される。およそ「論証 *ἀπόδειξις*」というものは、論証されるもの(結論)と、論証の出発点(公理)と、論証の根底にある類、という三つの要素を必要とする。第三のものを逸脱すると(フッサール研究者にはおなじみの)「他の類への移行」を侵してしまうわけだが、範疇の場合この類は「存在者」になろう。ところで、「存在者」そのものは「類」ではない。それゆえ論証は不可能である (KA, 645)。

ブレンターノはこれに対して、範疇の演繹にはいわば単線的な「論証」ではなく、「分割 *διαίρεσις*」という方法が使われると言う。「分割」とは「類」に本質的な区別を加えることによって種別化していくもので、「論証」と同様、経験に訴えず遂行することが可能という意味で「アプリアリな証明」あるいは「推論による確証 *πίστις διὰ συλλογισμοῦ*」を実現することができるが、こちらの場合の「類」はやや弱い意味での、後に見るような「類比による統一」でも十分に可能である (MSA, 145–147)。こうしてボーニッツが不可能と考えた範疇の演繹を、ブレンターノは実際に遂行してみせた。

3. 「实在概念」としての範疇。「類比による統一」

以上三人の論者の中で、ブレンターノは自身の立場がボーニッツのそれに最も近いと明言しながら (MSA, 81)、範疇を「实在概念 *reelle Begriffe*」(MSA, 82f) と特徴づけた。「实在概念」とは、まず第一に本来の意味での存在者を表している、ということであり、また第二に「普遍概念」でもある、ということである。以下ではこの立場を明確化しよう。

第一に、先に見たように、『形而上学』の中心的をなす、本来の意味での存在者であるものは何か、という問いに、アリストテレスは四通りの答えの候補を挙げていたが、それらの中で最も本来的なものが「範疇の諸形態」である。つまり範疇の諸形態とは、存在するものを概念的に捉える際の枠組みや、言語上の述語の形式ではなく、端的に、存在するものの諸形式である。認識や言語とは独立に、存在するものがそれ自体としてもつ諸局面を表したものが、諸範疇だということになる。

また第二に、範疇が普遍概念であることは、これが「最高次の類」であることから明らかである。アリストテレスの言う「共通者、普遍者 *κοινά*」の説明のために、ブレンターノは『範疇論』冒頭 (1a1f) の「同義的」「同名異義的」²²の区別を引き合いに出して説明している (MSA, 85f)。「同名異義的 *ὀμώνυμον*」なものとは例えば、「人間」と「人間の絵」が、いずれも「ζῷον」と呼ばれるような場合である (ギリシャ語の ζῷον は、一つの同じ語で「動物」という意味と (絵や彫像など)「似姿」という意味をもつ)。この場合両者は同じ語で呼ばれながら、同じ類に属することはできない。他方「同義的 *συνώνυμον*」なものとは、人間と牛とがいずれも「動物 ζῷον」と呼ばれる場合のように、同じ名前でかつ同じ意味で呼ばれる場合であって、このとき同義的なものはその名で表される同じ類に属することになる。こうした普遍概念がより上位の普遍概念に包摂される系列として類-種の系列が成立しているわけだが、中でも範疇は「最高次の類」であると言われ、これらの系列において最上位にあつて最も普遍的なものとして位置づけられている。以上の二点から、範疇は存在するものとして現実世界のうちに存在する普遍者であると考えられる²³。

22. 岩崎訳では「同名異義語」「同義語」となっている (p.135f) が、本論で「...的なもの」と訳したのは、Ackrill が、両者ともに「語ではなく、もの *thing* に適用される」(p.71) 用語と述べていることを踏まえた。こちらの方がブレンターノの立場にもふさわしい。

23. したがって、Chrudzimski & Smith は「どれほど彼の存在論が他の点で豊かであったとしても、自身のキャリアのどの段階においても、ブレンターノが普遍者 (の存在) を信じた *believe in universals* ことはなかった」(p.202) と述べているが、これは『存在者の多義性』が度外視されているのでなければ誤りである。Chrudzimski は「ブレンターノの学位論文における、アリストテレス説の解釈の重要な点は、普遍者もまたただちに、真のものの意味での存在者の概念のもとに包摂される、ということである」(Chrudzimski, S.63)「普遍者の存在を彼は常に、精神のうちにある存在として解釈している」(ebd. 64) と述べていることから、後に見る

さて、範疇は本来的な意味で存在者であり「最高次の類」である。したがって或るものが本来的な「存在者」であり、類一種の系列のいずれかに属する以上は、必ず範疇のいずれかに下属するということになり、学的に扱いうる対象すなわち「存在者としての存在者」の範囲を決定するという第一哲学の課題を果たすのは範疇のこのような性格だということになるが、では複数ある範疇はなぜ、さらに「存在者」という「より高次の類」に包摂されるのではないのだろうか。また逆にもし包摂されないとしたら、「存在者一般についての学」としての存在論はそもそも体系的統一性を確保できないのではないだろうか。そこで導入されるのが、諸範疇の「類比による $\kappa\alpha\tau' \acute{\alpha}\nu\alpha\lambda\omicron\gamma\iota\alpha\nu$ 統一」という議論である。

ブレンターノは、「同義的」から区別される「同名異義的」なものを、さらに互いに全く無関係な「偶然によって $\acute{\alpha}\pi\omicron \tau\acute{\upsilon}\chi\eta\varsigma$ 同名異義的なもの」と、同義的ではないがある種の関係性を保つ「類比によって $\kappa\alpha\tau' \acute{\alpha}\nu\alpha\lambda\omicron\gamma\iota\alpha\nu$ 同名異義的なもの」とに区別し、範疇の統一を形成するのは後者であるとする (MSA, 90–91)。ここで言われている「類比」とは何であろうか。

ブレンターノがトレンドレンブルクを参照して説明するところでは、類比とは数学的比例 ($A : B = C : D$) のように量的なものもあれば、『ニコマコス倫理学』で肉体のうちに視覚があるように魂のうちには理性があると言われる (1096a25) ような質的なものもあるが、いずれにしても端的に二つの物の間の類似関係ではなく、第一のものと第二のものとの関係、第三のものと第四のものとの関係、…等々が類似しているという、関係の類似性を表すものである。このような類比の理解をもとに、トレンドレンブルクは範疇とは関係性の類似性によって統一するものであると考えた (MSA, 93)。例えば「人間」が「実体」の範疇に属するのと同様に、「色」は「性質」の範疇に属し、「七」は「分量」の範疇に属し、等々となり、これらには関係の類似性が成り立っている。

しかしブレンターノは彼が述べていないこととして、もう一つより重要な類比の概念を指摘している。それは、ある一つの「項 *Terminus*」、*「原理 ἀρχή」* への関係による類比である (MSA, 95–96)。「存在者は様々な意味で言われるが、そう言われるすべての存在者は、ある一つの原理との関係において存在すると言われるのである」 (Met., 1003b5)。アリストテレスはここで「健康的」という語を例にとって、類比による統一のあり方を説明している (ibid. 1003a34)。普通に考えると、「健康的」とは第一義的には肉体の性質である。しかしその他にも、健康な肉体を保つ運動が「健康的」と言われ、健康な肉体をもたらす薬が「健康的」と言われ、健康な肉体の印である頬の色が「健康的」と言われる。ここでは多種多様な関係が言われているが、同じ一つの「健康な肉体」という同一項をめぐって関係の多様性が統一されている

「真としての存在者」に、第一実体以外の範疇を誤って含めてしまっていると考えられる。

のがわかる。ただしこの場合、同じ「健康的なもの」であるからといっても、「肉体」と「運動」と「薬」と「頬の色」とが同じ類に属さないのは明らかであろう。範疇の多様性もまた、共通の類によって、「一つのものについて καθ' ἑν」統一をなすのではなく、このような意味での、「一つのものに対して πρὸς ἑν」²⁴、「一つと同じ項への関係による類比」(MSA, 97)によって統一をなすのである。

では範疇において「同一の項」となるのは何だろうか。それは「存在者」が第一にそれであるところのものであり、つまり「実体」(ebd.)、より厳密には「第一実体 πρώτη οὐσία」もしくは「個体的実体 individuelle Substanz」である(MSA, 109)。「存在するもの」とは何かと聞かれた場合、まずは存在する当の「何か(実体)」をもって答えるのが自然であろう。そして「いかにあるか(性質)」「いかほどあるか(分量)」「いつあるか」等々に関しては、あくまで「何か」が存在してはじめて、その「何か」がどのように存在するかが問題になるのであり、実体に即して論じられるべきことであろう。またここにおいて、先の範疇として普遍者が現実世界のうちに実在するという論点に対して、抱かれるかもしれない違和感はかなり弱められる。普遍者としての各範疇は、個体的実体としての第一実体に従属するその限りでのみ現実世界のうちに実在すると言ってよい。もしここで個体的実体から独立に質や量や関係などが実在するかのように捉えるのであれば、アリストテレスがそこから離脱しようとしたとされるプラトン主義に近いものになる²⁵。しかしそれらは個物としての第一実体から独立に実在するわけではないのである。

24. なおこのプロス・ヘン構造は、ここから影響を受けたとされるハイデガーの文脈での Woraufhin、「存在」や「時間」を目指すという構造(細川参照)とは混同されない。ブレンターノの説明を厳密に受け取れば、もろもろの多義的なものをまとめる同一項となるものは、それら多義的なもののうちの一つであって、それらの背景にありそれらをそれらたらしめているものではない。「健康的なもの」をまとめるのは「健康的な肉体」であるし、範疇の統一はそれ自身範疇である「実体」である。「アリストテレス存在論においてプロス・ヘンの一なるものはウーシアである」(細川 p.69)。

25. 本論の発表時指摘されたように、ブレンターノの議論はアリストテレス研究で言われる focal meaning (cf. Barnes, 69-89)の議論を先取りするものと言えるが、これを導入した Owen は、プラトン主義からのアリストテレスの離脱という大きな流れの中のサブストーリーとして、存在者についての一般学は不可能とみなしプラトン主義を批判する初期から、存在者についての一般学に展望を見いだす時期への移行を特徴づけるものとして、focal meaning の拡張を位置づけた。

4. 「真としての存在者」。論理学と存在論

さて、こうして範疇を本来的な意味で存在するものと位置づける一方で、「真としての存在者」を布伦ターノは本来的な存在者ではないとした。これはどのような理論的配慮から出てきた論点だろうか。

まず、「真としての存在者」ないし「偽としての非存在者」ということで何が言われているのかを明らかにしよう。布伦ターノによれば、アリストテレスは真／偽ということ「悟性概念の結合 συμπλογή νοημάτων」、「肯定と否定」などと特徴づけており、「あらゆる言説 *Rede*, λόγος が言表 *Aussage*, ἀποφαντικός であるのではなく、真や偽が属する言説だけが言表なのである」などと言われる (MSA, 22–23, cf., *De interpr.* 17a2)。こうした諸規定をまとめつつ布伦ターノが規定するところでは、真や偽と言われるもの、真理の担い手となるものは、まず第一に、事物や事態など、外界に存立している実在的な現実存在ではなく、悟性・精神・思惟の内部に存するものであり、また第二に、単独の概念・感覚・表象ではなく、主語概念と述語概念との結合からなる命題ないし「判断 *Urtheil*」²⁶である (ebd.)。いずれの点においても、アリストテレスは文脈によってはそうでないものを真／偽と呼んでいるが、布伦ターノはそれは非本来的なものを見なしている。

これがなぜ「存在者」として検討されるのかと言えば、「SはPである」という形で「である」を伴って表されるからであろうが、ただし繫辞の「である／でない」が直接「真としての存在者」／「偽としての非存在者」なのではない（肯定文であるが誤った文、否定文だが正しい文が存在する）。むしろ「SはPである」は真／偽である、「SはPである」が存立する／しない」と明示されればわかるように、「真／偽である」とは命題全体を主語としたときの述語である²⁷。もちろん精神の内にある命題ないし判断と、精神の外側にある現実性との合致（「認識と事象との合致」 (MSA, 26)）が成立するか否かによって、真か偽かのいずれかが命題に帰されることになるが、いずれにしても「真／偽」と言われる当のものは「精神」の中にある「命題」ないし「判断」なのである。

26. 後の布伦ターノ (Brentano, 1889) の心理的現象の三分類において見られるような、「判断」は単に「表象」の結合ではなく、表象に加えて肯定・否定という態度決定の契機を必要とするという論点はここでは明確ではない。

27. 安藤は端的な「SはPである」を「事実判断」、「...」は真であるを「価値判断」と呼んで区別しつつも、布伦ターノ自身がここで認めているように（「第一の判断を下す者は、第二の判断によって第一の判断そのものと事態の存立との合致を明言する者と同様に、悟性及びその内に存する諸表象と、諸事物との等置を成し遂げているということは確かである」MSA, 36）、単純な「SはPである」という事実判断にも価値評価の契機が潜在的に含まれているとし、ジグヴァルトとヴィンデルバントの論争に言及している (p.26-29)。

ところでこの著作では明示されていないが、おそらくブレンターノはすでに後の判断論に見られるような「SはPである」を「PであるようなSが存在する」へと変換可能だとする考え²⁸をもっていたと思われる。実際ここで以下のように言われる。

「一般にあらゆる思惟事物、すなわちわれわれの精神内に客観的に *objectiv*²⁹現実存在して真の肯定的な主張の主体となりうるあらゆるものがそれ」(=真としての存在者)「に属する。われわれがわれわれの精神の中で形成するもののうち、真としての存在者の領域からまったく除外されるべきだというほど、一切の实在性を欠くようなものは一つもない」(MSA, 37)。実際、通常は实在世界とは無関係であると見なされる、アプリアリに分析的な命題(「あらゆる大きさはそれ自身に等しい」)や虚構的命題(「ケンタウロスは荒唐無稽の怪物である」)で真であるものをブレンターノは挙げているが、この場合「あらゆる<それ自身に等しくなるような大きさ>」³⁰「荒唐無稽の怪物たるケンタウロス」という主語が、「精神の客観」となりうるという意味で「存在する」という議論は自然であろう。

しかし、こうした「存在者」を本来の意味での存在するものに数えるにはかなりの違和感が感じられるであろう。こうした配慮から、「真としての存在者」は存在論ないし形而上学から除外される(MSA, 39)。とはいえ、これらは学的考察一般から除外されるわけではなく、「形式的学」としての「論理学」に属することになる。こうして「類」「種」³¹「種差」「定義」「判断」「推理」等の抽象的普遍概念もこうした存在者としての資格で論理的考察の対象となる。実際この前提の上で、ブレンターノは文法起源説に由来するトレンデレンブルクのある混同を退けることができたが、それは『トピカ』に見られる「定義」「類」「特性」「偶有性」といった述語群(実際これらも *tá κατηγορούμενα* (述語づけられるもの)と呼ばれる)と範疇との混同である(MSA, 122f)。これらは本来論理的考察に属する概念で、存在するものあり

28. Simons, p48f 参照。

29. ブレンターノが「客観 Object」ないし「客観的 *objectiv*」という語を使う場合は、近代の「主観的」と対置される意味ではなく、スコラ学やデカルトのもとでこの語がもつような、精神の作用によって定立されたものというような意味である。Chrudzinski & Smithによれば、「ブレンターノはしばしば、アリストテレスの真という意味での存在者の概念と、スコラ学の *ens objectivum* という概念とを、相互に置換可能な哲学的分析の道具として用いているが、両者のどちらも彼は存在論的に負荷のない *innocent* ものだと想定している」(p.198)。

30. アリストテレスの全称命題の扱いには問題があると言われるが、後のブレンターノによれば「あらゆるAはBである」は「BでないようなAは存在しない」と変換することで存在命題に帰着させられる(Simons, p.48f)。

31. 抽象的な普遍概念としての「類」「種」そのものは論理学的概念であるが、類-種の系列をなす各々の実質的普遍概念(「人間」「動物」「実体」など)は实在概念として存在論に属すると言える。この事情はフッサールの形式的存在論と実質的ないし領域的存在論との区別と同様であろう。

方ではないが、体系的予備考察なしに文献学的アプローチだけで、これらを範疇に関する議論から除外するのは難しい。

しかし存在論と論理学とを区別し、前者の優位性を確保した上であれば、範疇の相違が述語の文法的形式の相違とおおよその対応を見せていることも、存在論的原理の結果的な反映として問題なく受け入れることができる。「常識と一致するということが、とりわけ言語のうちにも表明された普遍的意識と一致するということが、健全な哲学的思考にとって歓迎すべき現象である」(MSA, 185)。彼の議論はこの点で、範疇と文法的形式との対応に関する師トレンデレンブルクの主張を、正しい地盤の上に改めて置き直したものと捉えることもできる。

5. 「四原因」の概念の遮断

トレンデレンブルクの文法起源説が大いに批判を浴びたことは再三触れたが、最後に、同程度に批判を受けたもう一つの論点、範疇は本来的には四原因と関係づけられるべき、という論点に関連して、ブレンターノがどう対応しているかを見てみよう。トレンデレンブルクによれば、範疇は文法的形式を導きとして形成されているが、本来は实在概念として位置づけられるべきであり、だとすれば四原因と併置されるか少なくとも関係づけられるべきものであった。

さてブレンターノは、範疇と同程度に原初的で重要であるが範疇には属さない概念を幾つか挙げている (MSA, 137-144)。それらにはすでに見た「存在者」の他に、「一」「善」なども数えられるが、重要なのは「形相」「質料」もまた範疇とは無縁であるとする議論である。「種」と「形相」とはともに同じく εἶδος と呼ばれるけれども、名前が同じであることに欺かれてはならないと彼は言う。

ここで説明のために「全体」／「部分」という概念対が導入される。ブレンターノによれば、当の実体の「部分」として類概念を完全に含まないものは、「直接的 direct」には類概念に包摂されず、ただ「還元的 reductiv」にのみ下属する。例えば、「馬」は「動物」という類に下属し、言い換えれば馬は「動物」を自身のうちに含蓄しているが、「馬の蹄」は、動物という類概念を完全に含んでいないため「還元的にのみ」、「動物」という類に下属する (MSA, 138f)。これと同じことが、「質料」「形相」についても当てはまる。アリストテレスは物体的実体として、質料と、形相と、両者の合成したものの三つを挙げているが、ブレンターノによれば本来的な意味での実体であり「直接的に」範疇に包摂されるのは両者の合成である (MSA, 139)。頭や蹄が馬の部分であるのと同じように、形相や質料はまったき実体の部分である。他方、類や種もある事物がそれに下属する場合、当の事物は類や種を有する意味で「部分」

としてもつと言えるが、類や種は事物の「論理的部分 *logischer Teil*」であるのに対し、「形相」や「質料」は事物の「物理的部分 *physischer Teil*」である（例えばある人について、彼は種として「人間」であるが、この人の形相をなしているのは「魂」である（*metaph.*, 1043b））（MSA, 140）。

こうしてトレンデレンブルクの、範疇は実在概念として四原因と関係づけられるべきとする論点は退けられることになる。このことの帰結としてブレンターノの範疇論は、いわば記述的で静態的な性格を帯びることになる。「原因」からの発生による説明というトレンデレンブルクの決して明確ではない道筋に対し、ブレンターノは原因の概念を遮断することで、実在的事物の明晰な構造を描くことができたと言える。

6. 結び。後のブレンターノ、およびフッサールとの関連

本論は哲学史的考察の体裁をとって、他の論者達との対比において、ブレンターノの範疇の解釈の特殊性を際立たせようと努めた。なるほど見られたように彼は他の論者たちの論争を配慮しつつ説得的な論点を吸収して自身の立論としたのであり、その意味では彼らの立場を「総合した」³²と言えるが、しかしそのような総合が可能であるのはあくまで範疇を「実在概念」とする立場から出発してのことである。

ところで哲学的論争はそもそも「総合」されるべきなのであろうか。複数の理論モデルが提起され、どれも長所と短所をもつとすれば、それらの優劣はそのつどの問題解決能力に照らして選択されるべきであるし、そうしたモデルの長所／短所を明示するために哲学史上の論争が研究されるのであれば、それは理論的な哲学研究と対立するものではなくむしろそれに貢献するものであろう。

そのような見方に則って、最後に本論で描かれた存在論をその後のブレンターノ哲学およびフッサール現象学と大まかに関係づけることで、結びとしたい。

見られるようにブレンターノは、「存在者としての存在者」についての学つまり存在論ないし形而上学と、「真としての存在者」に関わる学としての論理学とを分離し、前者をより基本的な学と位置づけた。存在論の領域では、彼は以後ますます個体的実体に強い実在性を認める一方で、普遍者からは存在論的地位を奪うようになり、それを補うように、「真としての存在者」は非実在的な対象を扱うようになっていき、これが中期の記述的心理学的な志向性の議論へと展開していく³³。

32. 「かくのごとくブレンターノは先人の諸説を三種に分けてこれを対比させながら、その間を調停して最も総合的な解釈を提出したのである」（安藤、p.56）。

33. ブレンターノ哲学の発展史はかなり複雑であるが、大まかには存在論ないし形而上学優位の前期（『存在者の多義性』もここに含めてよい）、志向性を中心とする記述心理学的議論

この両分野は、フッサールでも存在論と志向的分析との関係になぞらえることができると考えられる。しかしフッサールにおいては、少なくともさしあたりは存在論の体系に対して志向性の問題系がそれに先行し、存在者を対象化して検証する地位にあって、存在論はどちらかといえば目標であるのに対し、布伦ターノにあっては存在者の優位が前提として志向性の分析の背後に控えており、志向性の議論は志向の対象を実体としての心に存在論的に還元するための議論とも位置づけられる。両者を時系列的な先駆者-発展的継承者という関係で捉えるのではなく、問題事象に応じて選択されるべき二つの哲学的体系としてつきあわせてみるのは興味深いことだろう。

文献

- Ackrill, J. L.: *Aristotle. Categories and De Interpretatione* translated. with notes by J. L. Ackrill, Oxford University Press, 1963
- Ando, Takatsura 安藤孝行 : 『アリストテレスの存在論』 弘文堂新社、1958年
- Aristoteles: *Aristoteles graece, ex recensione Immanuelis Bekkeri, edidit Academia Regia Borussica*. Preußischen Akademieausgabe von I. Becker, Berlin 1831 (邦訳 : 『アリストテレス全集』 全 17 巻、岩波書店) (著作の略号は MSA に従う)
- Barnes, Jonathan: *Metaphysics* (in: *Cambridge Companion to Aristotle*, ed. J. Barnes, Cambridge University Press 1995, p.66–108)
- Brentano, Franz (MSA): *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles*. Freiburg i. Br., Herber'sche Verlagshandlung, 1862 (邦訳 : 『アリストテレスの存在論』 岩崎勉訳、理想社出版部、1933年) (略号 : MSA)
- (1874): *Psychologie vom empirischen Standpunkt. erster Band*. hrsg., O. Kraus, Felix Meiner Verlag (PhB192), Hamburg, 1973
- (1889): *Vom Ursprung sittlicher Erkenntnis*. Duncker und Humblot, Leipzig, 1889 (Nachdr.: hrsg. Oskar Kraus, Felix Meiner Verlag (PhB55), 1934) (邦訳 : 『道徳的認識の源泉について』 水地宗明訳、所収 : 『中公バックス世界の名著 62 ブレンターノ・フッサール』 中央公論新社、1980年)
- (1952): *Die Abkehr vom Nichtrealen. Briefe und Abhandlungen aus dem Nachlass, mit einer Einleitung*. Hrsg. Franziska Mayer-Hillebrand, A. Franke Verlag, Berlin, 1952 (photokopie: Felix Meiner Verlag (PhB314), Hamburg, 1977)
- Bonitz, Hermann: "Über die Kategorien des Aristoteles". (in: *Sitzungsberichte der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften*. Phil.-Histor. Classe, Bd. X, 1853,

が展開される中期、後期のもの主義 Reismus、の三段階で捉えられる。詳細は Chudzimski 参照。

- S.591–645) (略号 : KA)
- Chrudzimski, Arkadiusz: *Die Ontologie Franz Brentanos*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 2004
- Chrudzimski, Arkadiusz & Smith, Barry: „*Brentano's ontology: from conceptualism to reism*“. (in: *The Cambridge Companion to Brentano*. ed. Dale Jacquette, Cambridge University Press, 2004, p.197–219)
- Fugali, Edoardo: „*Trendelenburg, Brentano und die Aristoteles-Renaissance in der deutschen Philosophie des 19. Jahrhunderts: die Frage nach dem Ursprung der Kategorien*“. (in: *Franz Brentano's Metaphysics and Psychology*. ed. Ion Tanasescu, Zeta Books, Bucharest, 2012, p.13–52)
- George, Rolf: „*Einleitung*“. (in: *Aristoteles Lehre vom Ursprung des menschlichen Geistes*. Felix Meiner Verlag (PhB304), Hamburg, 1980, S.VII–XIV)
- George, Rolf & Koehn, Glen: „*Brentano's relation to Aristotle*“. (in: *The Cambridge Companion to Brentano*. ed. Dale Jacquette, Cambridge University Press, 2004, p.20–44)
- Hosokawa, Ryoichi 細川亮一 : 『ハイデガー哲学の射程』 創文社、2000年
- Jacquette, Dale: *Brentano on Aristotle's Categories: First Philosophy and the Manifest Senses of Being*. (in: *Franz Brentano's Metaphysics and Psychology*. ed. Ion, Tanasescu, Zeta Books, Bucharest, 2012, p.53–95)
- Kanzaki, Shigeru 神崎繁 : 「アリストテレスの子供たち —ヘーゲル・マルクス・ハイデガー」 (所収 : 『西洋哲学史 III 「ポスト・モダン」のまえに』 神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編、講談社 (講談社選書メチエ)、2012年)
- Kraus, Oskar: „*Biological Sketch of Franz Brantano*“. (in: *The Philosophy of Brentano*. ed. Linda L. McAlister, Humanities Press, Atlantic Highlands, N.J. 1976, p.1–9)
- Murata, Norio 村田憲郎 : 「新カント派と経験論の狭間で —F.ブレンターノ『アリストテレスにおける存在者の多様な意味について』に見る存在論」 (所収 : 『東海大学紀要文学部』 第96輯、東海大学出版局、2011年、p.21–43)
- Ohashi, Yoichiro 大橋容一郎 : 「新カント学派」 (所収 : 『哲学の歴史9 反哲学と世紀末』 須藤訓任編、中央公論新社、2007年、p.377–428)
- Owen, Guilym Ellis Lane: *Logic and Metaphysics in some Earlier Works of Aristotle* (in: *Logic, Science, and Dialectic. Collected Papers in Greek Philosophy* Cornell University Press, 1986, p.180–199)
- Prantl, Karl von: *Geschichte der Logik im Abendlande*. Bd.1: *Die Entwicklung der Logik im Altertum*. Leipzig, Hirzel, 1855
- Simons, Peter: „*Judging correctly: Brentano and the reform of elementary logic*“ (in: *The Cambridge Companion to Brentano*. ed. Dale Jacquette, Cambridge University Press, 2004, p.45–65)
- Smith, Barry (1994): *Austrian Philosophy. The Legacy of Franz Brentano*. Chicago, IL.,

Open Court, 1994

Smith, Robin: Logic. (in: *Cambridge Companion to Aristotle*, ed. J. Barnes, Cambridge University Press 1995, p.27–65)

Trendelenburg, Adolf: *Geschichte der Kategorienlehre*. Berlin, Verlag von G. Bethge, 1846
(邦訳：『カテゴリー論史』日下部吉信訳、松籟社、1985年) (略号：GK)

Yamamoto, Mitsuo 山本光雄：「訳者解説」(所収：『アリストテレス全集 1』岩波書店、1971年、p.141–166)

Zeller, Eduard: *Die Philosophie der Griechen in ihrer geschichtlichen Entwicklung. II. Teil, II. Abteilung: Aristoteles und die alten Peripatiker*. Leipzig: Reisland 1921